

他人事が自分事になる総合的な学習の時間を目指して ～里山の教材化への試み～

小 菌 博 臣 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Study of “Period of Integrated Studies” striving to provide compelling learning experiences for the learner: Trial of making the “Satoyama” teaching materials

KOZONO Hiroomi

キーワード：総合的な学習の時間教育、里山、環境教育、生活科との関連、思考ツール

I はじめに

本年度、第3学年の担任となり、本校の総合的な学習の時間（以下、総合）係となった。本校で7年間、低学年の担任をし、生活科の研究及び実践を積んできた私にとって、総合の係と授業実践は、新たなチャレンジのようなものであった。

しかしながら、全くのゼロからのスタートではなかった。もちろん、これまでの先輩方が作り上げてきた指導計画がある上、総合は、生活科と同じ研究会で語られることが多く、総合についても考える機会は多くあった。そのようなこともあり、曖昧ではあるが「私だったら、こんな総合の授業をしたいな。」という理想のようなものをもって

いた。それが、「他人事が自分事になる授業」であった。そして、「真剣な表情で対象に向き合う子どもの姿に出逢いたい。」という思いがあった。



【写真1 総合で見せる真剣な表情】

II 本校の総合的な学習の時間（のぞみタイム）について

1 のぞみタイムの「目標」と「育てようとする資質や能力」について

本校の総合（のぞみタイム）の目標は、総合の第1の目標及び学校教育目標「夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成」を基に、『身近な自然や社会、そこにかかわる人々についての課題を自ら設定し、互いに高め合いながら、情報を集めたり、調べたことを分析したり、表現したりすることができるとともに、学んだことを基に自分の生き方を考えることができる。』と設定している。

また、探究的な学習プロセスを基に、以下の表1・2のように、育てようとする資質や能力を5つの力に設定し、学年ごとの系統を明らかにしている。

【表1 育てようとする5つの力】

【感じる力】	【調べる力】	【考える力】	【伝える力】	【生かす力】
対象に対して幅広く課題意識をもつ力	課題に対して見通しをもつ力 様々な手段で調べる力	比較・関係付けたり、多面的に考えたりする力	追究したことを基に目的に応じて伝える力	追究したことを基に実践する力

【表2 育てようとする5つの力の学年系統表】

	3年生	4年生	5年生	6年生
感じる力	直接関わった人、もの、ことそのものに関することに興味・関心を抱き、自分で課題を見付けることができる。		関わった対象を通じて、その対象の周りのものにも興味・関心をもって課題を設定できる。	
	既習事項と関連させながら、関わった対象について、自分なりの感じ方ができる。		既習事項と関連させながら、関わった対象について、広い視野から理解することができる。	
調べる力	解決方法の見通しをもち、これまで学んだ多様な調べ方を用いて調べることができる。		結果を想定した見通しをもち、調べる観点を決め、計画を立てて調べることができる。	1年間の見通しをもち、調べる観点を決めて計画を立てて調べることができる。
考える力	事実や友達の考えを比較したり関係付けたりしながら自分の考え方を広げることができる。		目的意識をもって友達の考えを聞き、自分の考えを連続・発展させることができる。	目的意識をもって友達の考えを聞き、多面的な観点から論理をはっきりさせて考えることができる。
伝える力	自分なりに調べたことを相手に分かりやすく伝えることができる。		目的や場、状況に応じて、いくつかの資料からの確に選択して相手に伝えることができる。	
生かす力	「こうなりたい」、「こうしたい」といった願いをもつことができる。		今、自分のできることから具体的に目的をもって行動することができる。	将来の姿を想定しながら具体的に行動することができる。
	自分の追究の過程を振り返り、これからの学習や生活場面で学んだことを生かすことができる。		生活場面におけるこれまでの自分の取組を振り返り、生活の中に学んだ事を生かすことができる。	

2 のぞみタイムの「内容」について

各学年の内容の設定に当たっては、各学年間における体系と学年内における教科との関連性を重視している。特に、3年生の内容設定に当たっては、生活科との関連を踏まえている。詳細は、次で述べる。以下、本校の3年生～6年生ののぞみタイムの内容一覧を示す。

生活科の内容の階層性を参考にして、表3に示した各学年の内容に、階層性を見出し、体系化を図った。

生活科の9つの内容には、図1のような階層性がある（小学校学習指導要領解説生活編より）。第1の階層が児童の生活圏に関する内容、第2の階層が低学年に体験させておきたい内容、第3の階層が自己に関する内容である。

この考え方を取り入れ、図2の階層性を明らかにした。ただし、階層性は、本校ののぞみタイムにおける階層性である。

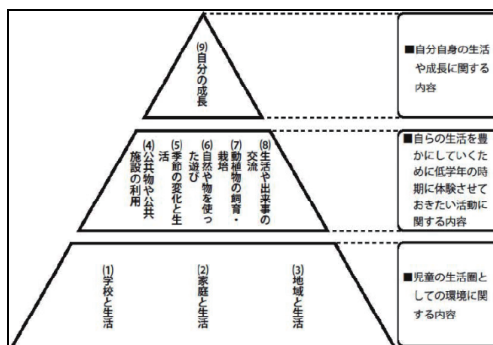
第1の階層は、地域の人々・社会・自然を一体として扱うことができる内容とした。第3学年で中心として扱う内容である。第2の階層は、

【表 3 のぞみタイムの学習内容一覧】

学習課題	学習対象	学習事項	学習活動
3年 地域の人・社会・自然	里山にある自然物すべて 里山を保護している人々	・里山における自然と人の 関係やつながり ・山を守る人々の生き方	○里山で基地を作って遊ぶ う ○里山を伝えよう
4年 環境 食育	身近な環境と今日の環境 問題 食をめぐる問題とそこに 関わる人々	・食をめぐる問題の解決と よりよい食生活を目指し た取組 ・環境問題と自分たちの生 活との関係 ・環境の保全やよりよい環 境の創造のための取組	○残食から肥料を作ろう ○作った肥料を活用しよう
5年 福祉	日常の暮らしを支えている ものや人々	・地域における福祉の現状 と問題 ・福祉問題の解決やよりよ い福祉を創造するための 取組	○バリア探しをしよう ○バリアを解決する取組を 調べよう
6年 キャリア	中学校や将来への展望と のかかわりで訪ねてみたい 人や機関	・中学生の学校生活の把握 ・働く人の存在や働くこと の意味 ・自分自身のよさへの気付 きと将来展望	○中学校生活について調べ よう

児童や学校，地域の実態を踏まえた，横断的・総合的な内容である。第4・5学年で中心的に扱う内容である。第3の階層が，自分の成長や将来の生き方に関する内容である。第6学年で中心的に扱う内容である。

この階層性は，それぞれの内容の大まかな系統性を示すとともに，全ての内容において，鹿児島の人・社会・自然が息づいていることや最終的には自分の成長や生き方へとつながることを示している。

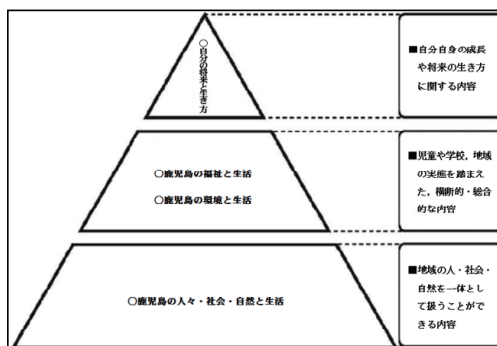


【図 1 生活科の内容の階層性】

3 のぞみタイムの「指導方法及び指導体制」について

(1) 思考を可視化し，具体的な操作活動を通して思考力・表現力を発揮させる

本校ののぞみタイムの指導では，「思考を可視化し，具体的な操作活動を通して思考力や表現力の発揮させる指導」を全学年で重点的に行っている。具体的には「思考ツール」と呼ばれる多様な情報を整理する手段を積極的に活用している。しかし，ツールを選択し



【図 2 のぞみタイムの内容の階層性】

ていく際には、その目的、子ども自身の必要感や技能等を踏まえて十分に吟味されなくてはならない。

(2) 他教科等との関連を積極的に図る

総合では、各教科等で身に付けた知識や技能を活用しながら問題解決を行う。例えば、お世話になった施設や人々に手紙を書いたり調べたことを報告書にまとめたりする際には国語科と、得られた数値をグラフや表にまとめたりする際には算数科と、子どもが追究する内容によっては、社会科・理科・図画工作科・音楽科・家庭科・体育科・外国語活動と関連を図ることができる。また、多様な活動の際には、道徳教育との関連を図ることも欠かすことはできない。このように、各教科等との関連を積極的に図ることで、総合での授業で問題解決が図ることばかりでなく、各教科等の授業で高い意欲で取り組むことができる。つまり、学力の3要素が各教科等をまたいで、総合的に高まっていくと考える。

(3) のぞみタイムの指導体制・運営体制

本校は、各学年4クラス(学年によっては複式学級もある)がある。そのため、校外活動等は、学年共通になることが多いが、授業展開や指導方法等は、担任裁量が置かれている。そこには、担任の専門性を十分に生かしてほしいという願いがある。その中において、学年主任は学年ののぞみ担当も兼任し、総合(のぞみタイム)係や連携団体との連絡調整を行い、学年経営とも関連させて企画・運営できるようにしている。

Ⅲ 本実践テーマについて

総合の目標は「自己の生き方を考える」ことである。この「自己の生き方を考える」には、次の3つの側面がある。(指導要領解説、総合編より)

- 人や社会、自然とのかかわりにおいて、自らの生活や行動について考えること
- 自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えること
- 上の2つを踏まえ、学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげて考えること

この目標を目指すためには、単元の学習内容が、子どもにとって「自分事になる」必要がある。「自分事になる」ことで、学習内容と子どもの生き方が深くつながり、自分のことのように学習内容を何とかしたいと強く思うのである。つまり、総合における学習プロセスは、「他人事が自分事になるプロセス」であると捉えている。

さらに、「他人事が自分事になる」ためには、自分の関心や疑問を基に、何度も学習内容にかかわる問題解決的な学習プロセスの連続が必要であると考えた。

「他人事が自分事になる」プロセスにおいて、子どもは、思考力・判断力・表現力と行った問題解決能力を発揮しながら、子どもが選んだ生き方を実現する上で必要な知恵や技能を身に付けることができる。

したがって、実践テーマを「他人事が自分事になる～」とした。

1 「里山」を内容として扱う

人々・社会・自然が一体となって出現するフィールドとして、「里山」を



取り扱う【写真2 里山(雑木林)の概観】

ととした。里山とは、統一的な定義付けはなされていないが、田畑、民家、竹林、広葉樹林といった、人が自然を利用した区域一体のことを指す。さらに、人が自然を利用することによって、多様な自然環境が生まれ維持されることで、動物や植物の多様性が豊かな地域でもある。つまり、里山は、人(社会)と自然が互いに生かし合い、生かされ合っているフィールドなのである。

しかしながら今日、里山の抱える問題も多く、放置林の増加による竹林の増加、生物多様性の低下、ゴミの不法投棄等、様々である。こういった問題は、そもそも人間の山離れが原因であるが、そこには、山に直接入るといった物質的な距離感だけでなく、意識的な距離感も内面的に

は潜んでいると言える。

また、本実践で扱う里山（雑木林）は県有林であり、森林ボランティアによって維持管理されている。里山での野外活動においては、このボランティアの方々の協力を得ながら行う。このような里山に、直接触れ、体いっぱい使って活動し問題を解決しようと考えたり行動したりすることは、本校の育てようとする力や態度を培うとともに、児童の生き方を考えることにつながるものであると考える。

2 生活科の学習経験（遊び）を生かすことができる学習活動を

3年生で初めて総合を学習する。つまり、本単元は、初めての総合の単元であり、子どもはどんなことをするのか不安でありながらも期待も多く抱いている。そこで、生活科での学びの経験を生かして取り組める学習活動を設定することにした。生活において、「遊び」を活動の中心に置きながら「探検活動」「おもちゃ作り」「栽培活動」などを経験してきている。このような経験を生かして取り組めるよう本単元においても「遊び」の要素を取り入れた。しかし、生活科における遊びは主に「個」での活動が中心となるが、本単元では、集団で協力しなければならぬ遊び「雑木林でのひみつ基地作り」を取り入れた。

表現活動においても、生活科での経験を活かす。第2学年時で経験した手紙や新聞作り等を取り入れた。その際、児童の必然性のある表現活動になるようにすることや他教科等との学習と関連させるなどして、教科横断的・総合的に活動が発展するようにする。

3 「人との交流」で「心の交流」を

本実践で扱う里山（主に雑木林）は、森林ボランティア団体「フォレスト



【写真3 人との交流】

22」によって維持・管理されている。その代表者である宮内さんには、来校してもらい授業に参加してもらったり、児童の書く手紙を受け取ってもらったりしてもらい、継続的に交流ができるようにした。このように、外部との交流の際は、団体との交流でなく、「人」との交流を大切にす。そうすることで、「心の交流」が生まれ、その人の生き方に触れることから、自分の生き方について考えるきっかけとなる。具体的には、野外活動（秘密基地作り）の際には、グループに一人のボランティアの方を付けて、互いにネームを付けて、「〇〇さん」と必ず名前前で呼ばせるようにしたり、手紙を書く際にも、団体宛てではなく、個人宛てにして書かせたりした。そうして、「フォレスト22の人」ではなく、「フォレスト22の〇〇さん」と、子どもから名前が自然と出てくるようにした。

IV 実践単元について

1 単元名と概要

実践単元は、第3学年単元「附属探検隊 山へ行く！」である。本単元では、鹿児島市内にある里山（主に雑木林）に繰り返し出かけて、秘密基地作りや間伐作業等の活動を通して、自ら考え行動する力を培うとともに、人・社会・自然とのつながりに気づき、今後の自分の生き方について考えることをねらいとしている。

本単元で取り扱う里山は、鹿児島市の北部に位置し、本校からバスで40分程移動した郡山地区にある。この付近は、多くの山々に囲まれ、水も豊かで、林業と稲作が盛んな地域である。特に、水田は、山々の斜面を利用した「棚田」がきれいに残っており、風光明媚な景観が今もなお残っている。

雑木林での野外活動は、計3回計画している。1回目は、共通体験としての山探検と秘密基地作りである。この体験を通して、山や秘密基地への思いを高め、「もっと、～な秘密基地を作ろう。」といった課題をグループごとに設定する。そして、2回目の野外活動に向けて、グループ毎に話し合ったり必要な道具を準備したりする活動が行われる。そうして、2回目は、

1 回目に完成しきれなかった秘密基地を完成させる活動となる。さらに、これまでの活動を振り返る中で、お世話になった山やボランティアの方々のために、何かできることはないかという思いから、3回目の野外活動である秘密基地の片づけや間伐作業へと発展する。

このように、山や人々と直接触れ合う体験を通して、これまで意識していなかった人・社会・自然のつながりを実感し、それらに目を向けるようになり、自分の学習や生活に活かしているとする意欲や態度を養っていきたい。

2 単元の目標

ア 山探検や秘密基地作りといった共通体験を基に、友達と話し合いながら取り組みたいことを決めることができる。

イ これまでの経験やGTからのアドバイス、図書資料等を生かして、試行錯誤しながら自分なりに工夫して、秘密基地作りや製作活動に取り組むことができる。

ウ 自分と友達の活動や工夫を比べて、共通点や差異点に気づき、自分の活動に生かしながら取り組むことができる。

エ 活動を通して、気付いたことや感じたことを分かりやすく、他者に表現したり、手紙やカード等にかいたりすることができる。

オ 自分の追究過程を振り返り、今後も人・社会・自然とのつながりを大切にしていこうとする見方・考え方をもち、山の片付けや間伐作業に取り組むことができる。

3 活動計画 (全 70 時間)

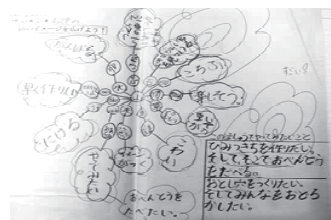
- (1) 「山」に対するイメージを広げよう
- (2) 山へ行く計画を立てよう
- (3) 山で遊ぼう
- (4) 山遊びを振り返り、今後の学習計画を立てよう
- (5) 計画を基に、2回目の山遊びに向けて準備をしよう
- (6) 2回目の山遊びへ出かけよう
- (7) GTにお礼の手紙を書こう
- (8) 里山について調べよう
- (9) 山へのお礼活動として、片付けや間伐作業をしよう

- (10) 単元全体を振り返り、学んだことやこれからの自分の生き方について話し合おう

V 実践の実際

1 「山」に対するイメージを広げよう

山に対するイメージを膨らませる具体的な方法として、ウェビングを取り入れた。



子どもに、【写真4 ウェビングのノート】

ウェビングをさせる際は、「山にあるものは?」「それを使ってできることは?」「山でやりたいことは?」というふうに、段階ごとに発問を行い、ウェビングを広げるようにした。

2 山へ行く計画を立てよう



【写真5 事前指導に用いた写真の一部】

事前踏査をした際に撮った写真を見せ、具体的な物や場所を見せながら指導を行った。ここでは、活動のルールや安全指導を中心に行った。また、防災教育の観点から、学校保管の簡易トイレを使用するようにし、その使い方の事前指導も行った。

3 山で遊ぼう (1回目の野外活動)

山遊びでは、まず山探検を行い、活動する雑木林の概観をつかませた。その際、グループ名を雑木林



【写真6 山探検の様子】

にいる動植物名から付けるよう指示して、多様な動植物に目を向けることができるようにした。グループは4~5人の8班とした。

山探検後、どのような活動を行うか、話し合う活動を設定した。その中で、「秘密基地作り

をしよう」という課題を設定し、その後は、グループ毎に秘密基地作りを行った。



安全指導に【写真7 秘密基地作りの様子】

関しては、以下のような指導を行った。

- ・ 境界木にテープを巻いて、活動範囲を限定
- ・ GTからの「のこぎり指導」

4 山遊びを振り返り、今後の学習計画を立てよう

	6月2週目	6月3週目	6月4週目 1学期考	7月1週目	7月2週目ごろ 山遊び(2回目)
たけのこ					
はん					

【写真8 付箋を用いた活動計画作成】

2回目の山遊びに向けて、学校で取り組みたいことを付箋に書いて、時系列に並べながら活動計画を立てることができるようにした。

その際、GTにも来校してもらい、山の材料をもってきてもらうなど、協力をお願いできるようにした。

5 計画を基に、2回目の山遊びに向けて準備をしよう

ボランティアに協力をお願いし、雑木林にある材木を学校に運んでもらい、それを使って製作活動が行える



【写真9 秘密基地作りに向けた活動】

ようにした。2回目の秘密基地作りに向けて子どもたちが作った物は「看



【写真10 工作教室の様子】

板・柵・荷物掛け・旗」などであった。

途中、ボランティアの方々による工作教室も開いた。ここでは、竹のコップ、箸、箸置きを、ボランティアの方々の指導と協力を得ながら、

全員が作成した。このコップなどを2回目の秘密基地作りにもって行って、お弁当のときに使いたいという意気込みが強くなった。

6 2回目の山遊びへ出かけよう



【写真11 2回目の野外活動(秘密基地の完成)】

野外活動では、2班に1人ずつボランティアの方を付け、ボランティアの方々とかかわりを深めるようにした。その際、活動前に、自己紹介や班の目標を発表させ、目標を共有できるようにした。

また、学校で作った看板や飾りなどを持って行かせ、学校での活動を生かすことができるようにした。

子どもたちは、1回目の秘密基地作りに比べて、目的意識を明確にもって取り組み、活動への達成感や満足感も2回目



【写真9 子どもが書いた手紙】

の方が多く味わうことができたようである。

7 GTにお礼の手紙を書こう

2回目の活動を振り返る中で、ボランティアの方々にお礼を伝えたいという思いが生まれてきた。そこから、国語科「気持ちがつたわる手紙を書こう」と関連を
関りながら、お礼の手紙を書く活動を設定した。国語科で、手紙の書き方を指導し、総合で、事前の話合いと実際に書く活動を設定した。

<夏休みには・・・>

子どもたちが書いたお手紙は、都合により授業で渡せな



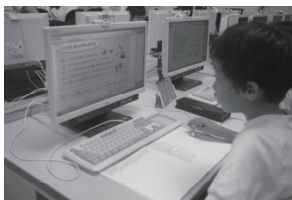
【写真10 子ども宛ての残暑見舞い】

残暑見舞いもついであげます！
暑い日が続きますね。元気に生活できているかな？家族のお手伝いをしたり、家族でお出かけしたり楽しい夏休みを送ってくださいね。
先日、みなさんが国語の時間に書いたお手紙を、フオレスト2の宮内さんに渡しました。みなさんが書いた立派な手紙に感謝していますよ！

かったため、夏休み期間に、私からボランティア代表の宮内さんに渡した。その時の様子や宮内さんの言葉を、夏休み期間中に出した残暑見舞いに記して、学級の子どもたちへ宛てた。

8 里山について調べよう

国語科「里山は未来の風景」を学習した子どもたちは、里山がどんなところなのかを、知的に理解することになった。そこ



【写真 11 里山の調べ学習】

から、里山への知的好奇心が生まれ、里山についての調べ活動を設定した。インターネットを使った調べ活動や図書資料を使った調べ活動を取り入れた。いずれも、他教科等との関連を図った。子どもたちは、里山に関する様々な知識や情報に出会うことができた。

VI 実践の考察

本実践は、ここまでである。今もなお実践中である。子どもたちは、確かに里山について、自分事になりつつある。それは、野外活動で里山の面白さを体感したり、調べ学習等でその価値を理解したりしてきたからであると分析している。今後、ボランティアの方々の生き方に触れ、自己の生き方へと発展させていきたい。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成25～27年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、総合的な学習の時間において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

<参考文献>

- ・文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説 生活編 総合的な学習の時間編
- ・田村学・黒上晴夫(2013) 考えるってこういうことか! 「思考ツール」の授業 小学館
- ・鹿児島大学教育学部附属小学校(2000) 総合的な学習の時間を創る 東洋館出版社